

「大韓民国ロボット大戦」から垣間見える 韓国のロボット産業育成戦略と ロボット教育事情

すきうら ともき 杉浦 富夫 (杉浦機械設計事務所)

韓国のロボット産業育成戦略

2005年末に韓国政府は「知能型ロボット産業ビジョン・発展戦略」を掲げた。この戦略を立ち上げた背景は、次の理由からである。韓国政府は2005年の時点で韓国のロボット産業技術が日本に劣っていると考え一方で、世界の知能型ロボットの市場規模が2003年時点の144億ドルから2015年には2,000億ドルに拡大すると見込んでいる。これらの分析により韓国政府は日本に一気に追いつくべく本戦略を立ち上げ、都市、大学、民間企業と一体となり2万人のエンジニア人材の育成とコア技術の開発、首都圏を中心としたロボット産業クラスターの構築に取り組んでいる真っ最中だ。そして2013年には世界シェア15%の三大生産国に躍り出ると同時に新たに10万人もの雇用創出を実現したい考えだ。

Korea Association of Robot Industry (KAR) (韓国語)
<http://www.robotics.or.kr/kr/>

国際都市仁川市と「大韓民国ロボット大戦」

韓国の都市でも特に仁川(インチョン)市は、ロボット教育やロボットエンタテインメントに熱心であり、2004年から仁川市と知識経済部(政府)の後援、仁川情報産業振興院の主催により「大韓民国ロボット大戦(KOREA ROBOT GAME FESTIVAL)」というロボット競技会を毎年春に開催している。仁川市はソウルの北西に位置し首都ソウルのベッドタウンの役目を果たすと同時に、アジア有数のハブ空港である仁川国際空港を持ち、黄海に接する臨海開発都市として急速な発展を遂げている国際都市でもある。ベッドタウンなので子供も多く、未来を担う子供のロボット教育にも家族ぐるみで熱心に取り組んでいる。



朝のロボット検査場は大混雑する



大きな声援を送る観客。ジュニアクラスのご両親が多い。

注) 日本で置き換えるとソウルが東京、仁川が横浜市、釜山が大阪と言っても良いだろう。

筆者は、2008年の第5回大会から同市の招待によりこの大会に参加しており、今年で3回目の参加となる。大会の実際の進行、運営はボランティアの市職員、大学生、KARに所属するロボット企業などで、すでにロボット産業クラスターが構築され年々大きく育ってきている印象だ。

注) 筆者はDYNAMIZERと共に、韓国で行われた本大会の前身の諸大会やイベントにこれまで10回以上参加している。

今年の大会は第7回大会で、5月15～16日の2日間、プロバスケットボールの競技場である仁川三山ワールド体育館で行われ、韓国勢約1,140チーム、海外勢約7カ国16チーム、総選手数約1,700人が参加する大規模なものになった。

大韓民国ロボット大戦サイト
<http://www.robotwar.or.kr/> (韓国語)
<http://www.robotwar.or.kr/robotwar/movie.php> (動画が見られる)

大韓民国ロボット大戦の特徴

筆者なりに本大会へ参加してきて感じた感想をここであげる。

(1) 多彩な競技会を2日間で消化してしまう運営力

1,200チームもの猛烈な数の参加チームによる多彩な競技会を、2日間で消化してしまう。一方、毎回スケジュールは押し回してしまい、今回も、予選は21時に終わった。会場はそれも見越して押さえてあり、スタッフも地方からの参加者もそのような遅延を見込んでいる。韓国語で言う「ケンチャナヨ」(どうにかなるさ)精神なのだろう。

(2) 多彩な競技種目

幅広い年齢層をカバーする多彩な競技が用意されている。競技内容に関しては後述。

(3) 参加選手は意外とクール

かつて、日本のROBO-ONEに参加し勝負にこだわっていた大学生の選手は、現在は案外クールである。TV収録の影響か、勝負よりもむしろエンターテナーとしていかに観客を魅了できる試合ができるか、楽しんでいるように見える。彼らの姿勢の変化は、日本のROBO-ONEへの参加経験から学んでいるのかもしれない。



種目が多いので表彰者だけでこの人数